

## ハイデルベルク信仰問答講解説教 4 4 「人を造り上げる言葉を」(2012年8月5日 礼拝説教)

## 【聖書箇所】

【賛歌、ダビデの詩。】主よ、どのような人が、あなたの幕屋に宿り/聖なる山に住むことができるのでしょうか。それは、完全な道を歩き、正しいことを行う人。心には真実の言葉があり、舌には中傷をもたない人。友に災いをもたらさず、親しい人を嘲らない人。主の目にかなわないものは退け/主を畏れる人を尊び/悪事をしないとの誓いを守る人。金を貸しても利息を取らず/賄賂を受けて無実の人を陥れたりしない人。これらのことを守る人は/とこしえに揺らぐことがないでしょう。(詩編 15 : 1-5)

だから、偽りを捨て、それぞれ隣人に対して真実を語りなさい。わたしたちは、互いに体の一部なのです。怒ることがあっても、罪を犯してはなりません。日が暮れるまで怒ったままでいてはいけません。悪魔にすきを与えてはなりません。盗みを働いていた者は、今からは盗んではいけません。むしろ、労苦して自分の手で正当な収入を得、困っている人々に分け与えるようにしなさい。悪い言葉を一切口にしてはなりません。ただ、聞く人に恵みが与えられるように、その人を造り上げるのに役立つ言葉を、必要に応じて語りなさい。(エフェソ 4 : 25-29)

## 【説教】

今日は、ハイデルベルク信仰問答の第43主日、問112を読みます。ここは十戒の第九戒「隣人に関して偽証してはならない」について扱った部分です。この第九戒は「偽証」という言葉に示されておりますように、これは元々法廷における証言に偽りがあってはならないという戒めであり、裁判という場面が個々の生活にとっては日常的ではないということもありますが、しかし近年では、裁判員制度があり、誰でもそのような裁判に関わり得る状況にあります。ただそう申しましても、やはりそれは特別な場合であって、切実に欠けるという意見も多いのです。裁判自体がわたしたちの生活に稀であり、しかもそこにおいて偽証することなど考えたこともないというわけです。

古代イスラエルにおいて、この法廷における証言は、もっと身近な事柄でありました。裁判は町の入口、門で行われました。争いごとがあるとそこに人々は集まり、町の長老がそれを裁きます。そしてその訴えは二人または三人の証言によって立証される必要がありました。誰もがその審理に加わることができた。しかしその身近さが仇となり不正な裁判も頻繁に行われたというのです。つまりそれは偽りの証人を立てて自分に有利に裁判を動かすことであります。賄賂をとって証人を集めれば簡単にその訴えが動くのです。自分の思いのままに真実が曲げられていく。それでえん罪が起きます。無実の人が裁かれるのです。それは時に死を持って償うものとなりました。そこに歯止めをかけたのが、この第九戒の戒めでありました。

そう考えますと、この戒めにイスラエルの社会正義を如何に保つかがかかっていたと考えてもよいのです。つまり社会的地位や経済力によって真実がいくらかでも曲げられてしまう。それほど不正がまかり通る社会にあって、如何に真実を貫くか。正義を保つか。それはその共同体にとって死活問題でありました。不正にまみれた社会は必ず衰退するのです。人々は何を信じたらよいのか分からなくなり、疑心暗鬼、猜疑心の塊となって、その不満を国家にぶつけるでしょう。世界にはそういう国々がいくらでもあります。わたしたちの国でもそういう法曹界における不祥事が起こります。以前、検事が自分の主張を正当化するために証拠を改ざんするという事件がありました。そうなると国民は国家を信頼できなくなるのです。如何に公平な裁きができるか。それが共同体の健全な形成に不可欠なのです。第九戒の背後にはそういうイスラエルという共同体の存立という大問題があるのであります。そこにこの戒めの切実さがあります。

しかし、第九戒は、もっと根本的な人間の罪を明らかにいたします。創世記の第3章に人間の墮罪の話があります。そこで人間が陥った罪とは、あの蛇の誘惑からも分かるように、神のようになること、そして善悪を知るというものでした。つまり

人間が神さまに代わって善悪を判断し裁くということが聖書の明らかにする罪の実態なのであります。そこで人間は神さまを押しつけて、自分がその裁きの座に着こうとするのです。自分が裁き主になるのです。そしてその罪の現実、わたしたちの実際の生活に顕著に現れてまいります。

そこで信仰問答の問112を読みましょう。信仰問答は、この第九戒をもっと身近な問題として取り上げています。それはまさに罪の現実、自分が神さまを差し置いて裁き主になるというものであります。それがここで言われるような陰口や中傷を誘引し、また人の言うことを鵜呑みにして軽率に断罪するという過ちを引き起こします。そういうことが如何に巷に溢れているか。人はそういうゴシップを好みます。ジャーナリズムもその罪の虜のようになっていきます。そういう記事を書けば注目されるのです。人のあら探しをし、過去の失敗を暴き出す。必死になってそういう情報を得ようとします。そういう週刊誌が売れ、そういうワイドショーを人はよく見るのです。そしてそれを鵜呑みにして、それを話題にまたおしゃべりに時間を費やしている。何という愚かさでしょう。それこそ先週、「盗んではならない」のところで浪費の話をしたましたが、それこそ時間の浪費であって、これほどに空しいことはありません。

ルターは、「だれでも隣人のようなわきより、悪いわきを聞きたがるのは、世にあまねき悪性の病弊である」と。カルヴァンも「われわれは他人のあらさがしをしたり、これを暴露するという毒のある楽しみにふけるように全世界をあげて傾いている」と言います。それは自分とは関係ない別世界のことというよりも、わたしたちの身近な家族や学校の友人、職場の仲間、そして教会の交わりにおいても日常的に起こることなのであります。いかにわたしたちの交わりがそのような毒のある楽しみに満たされ、破壊されるか。それを分かっているにもかかわらず、なかなか止めることができない。

なぜ人はそのように陰口、中傷を好むのか。例えば、週刊誌の見出しを見て、ある政治家の過去の失態を知る。何だ、口では偉そうなことを言っても、所詮、大したことないな。あいつよりも自分の方がまだましだと考える。つまりそういう悪口を聞く時に、わたしたちは自分の値打ちが上がったような錯覚に陥るのです。人を非難することで自分の価値が上がるように思うのです。卑しいことですが、わたしたちはそのようにして自分の存在を保つようになる。

人の悪口を言い、断罪することでしか自分を保つことができない。それはそれだけ自分を失っているということではないか。だからそうでもしないと自分の存在を保てないのです。実際、わたしたちは評論家ぶって、社会のこと、政治のことをいろいろ言うでしょう。でもそこで自分自身を省みることなしにただ社会を断罪するだけになっていないでしょうか。何よりもそこ

で問われているのは自分自身であることを心に留めなければなりません。人を悪く言うことが、実は自分のいたらなさ、中身のなさを露呈していることなのです。選挙になれば途端に相手に対する中傷合戦になるということがあります。如何に相手のスキャンダルを暴き出すか。それで転覆させる。政策で勝負するのではない。もしわたしたちの社会がそういう陰口や中傷の上に成り立つ社会であれば、その社会自体が中身の無い、空しいものであることを認めなければなりません。

わたしたちの言葉は、ともするとそのように人を貶めて、そこで自分が上に上がるための道具になってしまいます。しかしそういう言葉でその共同体は健全に形成されるでしょうか。家族や友人との関わりが、そういう言葉で健全な交わりをつくることができるでしょうか。その根拠もないわさが、小さな言葉一つが、その交わりを破壊し、長い年月をかけて積み重ねてきたものを一瞬で破壊するものになるのであります。それだけ言葉は重いのです。人を生かもし殺しもする。それを悪魔が利用しない手はありません。そういう言葉を悪魔は利用するのです。箴言に「口数が多ければ罪は避け得ない」(10:19)とあります。またヤコブ書では「舌は、疲れを知らない悪で、死をもたらす毒に満ちています」(3:8)とあります。ですから信仰問答でも「あらゆる嘘やごまかしを悪魔の業そのものとして神の激しい御怒りのゆえに遠ざけ」と言います。

ですからこの戒めがわたしたちに問いかけているのは、言葉を吟味することです。どういう言葉を語るか。聞くのか。人の悪口を一緒に喜んで聞くのではなく、そこでそれを遠ざける。それは意識して離れること。気をつけていないとすぐにもそういう罪にわたしたちは流されてしまいます。そういう意識があるかないかは大きいのです。そしてこの信仰問答が更にわたしたちに教えるのは、ただそういう悪い言葉を遠ざけ、離れるだけではなく、「真理を愛し、正直に語りまた告白すること。さらにまた、わたしの隣人の榮譽と威信とをわたしの力の限り守り促進する」そういう言葉を語ることへとわたしたちを導くのであります。しかしわたしたちの舌は毒に満ちているとあります。罪の人間の語ることはやはりそういう罪の毒に満ちているのです。ではそういう真実の言葉はどこから来るのでしょうか。

それはイエス・キリストにおいてのみ、わたしたちに与えられるものであります。今日読みましたエフェソの信徒への手紙に「聞く人に恵みが与えられるように、その人を造り上げるのに役立つ言葉を必要に応じて語りなさい」(4:29)とあります。人を造り上げるのに役立つ言葉とは何でしょう。「万物は言によって成った」(ヨハネ1:3)とヨハネ福音書は伝えます。神さまの言葉はこの世界を創造しました。破壊するのではなく造り上げる言葉です。そしてその言葉は人間を創造する命の言であります。それは決して人を貶める言葉ではない。交わりを破壊するものではない。人を造り回復させる言です。それが神さまの言葉でありキリスト御自身であります。その神さまの御言葉、キリスト御自身を語るものとしてわたしたちは新しく歩み出すのです。

イエス・キリストは十字架と復活の御業によって、わたしたちを罪から救い出し、復活の命へと回復させてくださいました。主御自身があざけりの中で、偽りの証言の中で十字架におかかりになりました。それはそのようなわたしたちの罪を担うためです。そしてこの罪を十字架において打ち砕いてくださるためです。主はこの罪を十字架で打ち砕き、そして復活されました。人を造り上げる命がキリストに満ちあふれています。わたしたちはそのキリストの命に今生かされているのです。キリストによってわたしたちの舌は清められ、その語る言葉は人を造り上げる言葉と変えられてまいります。もう陰口や中傷ではない。キリストの言葉がわたしたちの舌に委ねられているのです。だから教会は伝道をするのです。ここにわたしたちを造り上げる真実の言葉があるからです。お祈りをいたします。